



アメリカ童話から

21

松原至大

奇術師の兎

あるところに、一匹の小さな兎がいました。兎の中でも、だれにも負けない長い耳、ピクピク動く鼻を持ったそれはそれはかわいい兎でした。この兎は、マーガトロイドという名の奇術師に飼われていました。

マーガトロイドさんは、この兎をかわいがつて、どこへ行くのにも、ポケットの中に入れて連れて行きました。ある日のこと、マーガトロイドさんは、兎を連れて、オーケストラの演奏会に行きました。会場にはいると、一番うしろの席に、そつと腰をおろしました。この奇術師は有名な人で、だれにでも知られていたので、多くの人に顔を見られるのが、いやだつたからであります。

オーケストラの会は、よく時間がのびて、終るのがおそくなることがあります。この日も、なかなかおしまいになりませんでした。ポケットの中にはいつていた兎は、苦しくなつてしまいました。そこでポケットから、そつと首を出して、マーガトロイドさんの顔を見ました。マーガトロイドさんは、いつしようにけんめいに、オーケストラに聞きいつています。兎は我慢ができなくなつて、床の上にとび出しました。そしてそつと、通路におりました。だれも、兎に気がつくものはありません。みんないつしようにけんめいに、オーケストラを聞いているの

でした。

兎は音のしないように、通路からステージの上にあがりました。ステージにいたオーケストラの人たちも、それに気がつきませんでした。いつしうけんめいに、音楽を演奏していたからであります。

オーケストラの人たちは、いろいろな音を出していました。兎の長い耳は、じつとしていることができませんでした。どこか音のしないところへ行きたくまりました。

その時、よいあんはいに、テューバ（低い音を出す大きなラツパの楽器）を演奏する人が、休んでいました。兎はテューバが、床の上においてあるのに気がつきました。その中にとびこんで、奥の方へはいこみました。こんなところへはいつてしまえば、たしかにうるさい音楽はきこえませんが。

けれども少ししたつと、テューバの演奏者は、テューバを両手でとりあげました。番がきて、大きな音を出さなければならぬのでした。頬をふくらませて、ぐつと吹きました。でも音が出ません。もう一度頬をふくらませて、力いづばいに吹きました。すると、小さな兎は、その息で、外へ吹きとばされてしまいました。

吹きとばされた兎は、オーケストラを聞いていた、ひとりの男の子の膝の上に落ちました。これはまたなんということでしょうか。その男の子は、ふだんから兎がほしくてならなかつたのでした。

「うわつ、お母さん、ぼく、兎をつかんだよ」

こういつて、男の子は、ならんでいたお母さんを、脇でぐつとおしました。

オーケストラが終ると、マーガトロイドさんは、通路をおりて、その男の子のところへ行きました。この奇術師は、今までのことを、なにかも見えていたのです。

「失礼ですが、それは私の兎で」

と、マーガトロイドさんは、気の毒そりに男の子にいました。すると男の子はびつくりして、

「あつ、おじさんは、マーガトロイドさんでしょう。あの有名な奇術の大家の」といいました。

「ええ、そうです。」

と、マーガトロイドさんは答えなければなりませんでした。

「では、おじさん、おじさんが、ほんとうにあの有名な奇術師なら、おじさんの帽子の中から、兎をいく匹でも取り出せなければ。」

男の子は、兎を両腕でやさしくかかえながら、こういいました。

「なるほど、それはほんとうですね。それができなければ、ねえ。」

と、マーガトロイドさんはいいました。マーガトロイドさんは、この男の子が、どんなに兎をかわいがるかという事、そしてどんなによい子であるかという事を、よく見ぬきました。そしてそのまま大勢の人の中にはいつて、どこかへ行つてしまいました。

そこで男の子は、その兎を連れて、お家へ帰りました。早速小さな家を作つて、それに入れて、人じんをたくさん食べさせました。それから、その兎は、マーガトロイドさんのところにいた時と同じように幸福に、いいえもつともつと幸福に暮したということがあります。(エリザベス・オートン・ジョーンズ女史の作による)

(Elizabeth Orton Jones)